

この世に、いかでかかることありけむと、めでたく

おぼゆることは、文こそ侍れな。『枕草子』に、返す

返す申して侍るめれば、こと新しく申すに及ばねど、

なほいとめでたきものなり。遥かなる世界にかき離れ

て、幾年あひ見ぬ人なれど、文といふものだに見つれ

ば、ただ今差し向かひたる心地して、なかなか、うち

向かひては思ふほども続けやらぬ心の色をも表し、言

はまほしきことをもこまごまと書き尽くしたるを見る

心地は、めづらしく、うれしく、あひ向かひたるに劣

りてやはある。

つれづれなる折、昔の人の文見出でたるは、ただそ

の折の心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。ま

して、亡き人などの書きたるものなど見るは、いみじ

くあはれに、年月の多く積もりたるも、ただ今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、かへすがへすめでたけれ。なにごとも、ただ差し向かひたるほどの情ければりにてこそ侍るに、これは、ただ昔ながら、つゆ変はることなきも、いとめでたきことなり。

いみじかりける延喜・天曆の御時の古事も、唐土・

天竺の知らぬ世のことも、この文字といふものなから

ましかば、今の世のわれらが片端も、いかでか書き伝

へましなど思ふにも、なほ、かばかりめでたきことは

よも侍らじ。